

## 肝腫瘍性病変における当院MRIの現状

宗盛 修, 梶原 康正, 今井 茂樹, 龜井 健, 森 俊博,  
玉田 勉, 白井 博志

近年, MRI装置の進歩には目覚ましいものがあり、今まで苦手としていた腹部領域においてもCTを凌駕しているとの報告が多くみられる。今回我々は、過去3年間に肝腫瘍病変に対し施行されたMRIをCTと比較検討し、肝腫瘍病変における当院MRIの意義について検討した。検討結果で、MRIは肝血管腫の診断においては極めて有用と考えられたが、小肝細胞癌ではCT以上の情報は見られなかった。

(平成6年7月28日採用)

### The Present State of Our MRI Systems for Detective Evaluation of Liver Masses

Osamu Munemori, Yasumasa Kajihara, Shigeki Imai, Tsuyoshi Kamei, Toshihiro Mori, Tsutomu Tamada and Hiroshi Shirai

The recent remarkable advances in MRI equipment have encouraged the frequent use of abdominal CT, which had previously been often avoided because of some difficulties.

We considered the significance of MRI for the diagnosis of liver masses on the basis of a three year comparative examination of MRI and CT. It demonstrated that MRI was a quite effective diagnostic ally in cases of hepatic hemangioma. In cases of small hepatoma, however, MRI examination did not provide significantly more information than CT scanning. (Accepted on July 28, 1994) *Kawasaki Igakkaishi* 20(3):177-182, 1994

**Key Words** ① MRI ② Liver ③ CT

状について成績も含めて検討した。

#### 緒 言

#### 対象と方法

近年、肝腫瘍性病変の検出にMRIが有用との報告<sup>1)～4)</sup>が数多くみられ、また新しい撮像法の開発によりCTを上回る成績がみられる。しかしながら報告の多くは高磁場装置での検討であり、川崎医大附属病院のMRI装置と同様の中磁場での検討は少ない。

今回、当院における肝疾患に対するMRIの現

対象は1990年4月から1993年3月までに肝腫瘍性病変が疑われ、当院MRI装置にて検査が施行され、組織学的に、または臨床的にほぼ診断が確定している原発性肝癌32例、肝血管腫36例で、detectabilityおよびT<sub>1</sub>、T<sub>2</sub>強調画像でのintensityの変化について検討した。

変化は正常肝実質を基準とし、 $T_2$ 強調画像で脾臓と同程度の intensity は中等度高輝度 (high<sup>+</sup>) とし、正常肝実質よりわずかに高輝度は軽度 (high<sup>+</sup>) とし、胆汁と同程度高輝度なものは高度 (high<sup>++</sup>) とした。なお、極端な巨大病変や多発病変、経皮的エタノール注入療法 (PEIT) や、肝動脈塞栓術 (TAE) などにより病変の変性が疑われる症例は除外した。

MRI撮像は横河メディカル社製0.5テスラ超電導装置 RESONA PLUS を用い、スライス厚は 10 mm、スライス間隔 12 mm で  $T_1$  強調画像は TR=620 ms. TE=25 ms.  $T_2$  強調画像は TR=2000 ms. TE=90 ms. を基本的なパルスシーケンスとして用い、スライス枚数により多少シーケンスを変更した。撮像方向は CT と同様横断像で検討した。

## 結 果

原発性肝癌32例37病変の検討結果を Table 1 に示す。2 cm 以下の13病変において CT で描出された10例のうち 3 例は MRI にて描出されず、CT にても描出されなかつた 3 例は全例 MRI にても描出されなかつた。CT の detectability は 77% で、MRI は 54% と低値を示した。なお CT、MRI ともに最小描出サイズは 1.5 cm であった。2~5 cm 径において CT は 100% 描出し MRI は 17 例中 16 例 94% であった。描出されなかつた 1 例は肝ドーム下の病変で呼吸によるアーチファクトのため描出されなかつた。5 cm 以上の病変は全例 CT、MRI ともに描出された。

MRI の intensity の変化は  $T_1$  強調画像で主

**Table 1.** Comparisation of MRI with CT for detective evaluation of hepatoma (32 cases, 37 lesions)

diameter(cm)	Echo	CT (with C.E.)	MRI $T_1$	MRI $T_2$	No.	detectability(%)	
2 >	(+) (+)	(+)	(+) (-) (-)	(+) (+) (-)	4 3 3	CT MRI	77 54
		(-)	(-)	(-)	3		
		(-)	(+)	(+)	15		100 94
2~5	(+) (-)	(+)	(+) (-)	(+) (-)	1 1	CT MRI	100 94
		(+)	(+)	(+)	1		
5 <	(+)	(+)	(+) (-)	(+) (+)	6 1	CT&MRI	100

**Table 2.** Comparisation of MRI with CT for detective evaluation of hepatic hemangioma (36 cases, 37 lesions)

diameter(cm)	Echo	CT (with C.E.)	MRI $T_1$	MRI $T_2$	No.	detectability(%)	
						CT	
						MRI	
2 >	(+) (+)	(+)	(+) (-)	(+) (+)	11 4	100	91
		non	(+) (-) (-)	(+) (+) (-)	3 3 2		
2~5	(+)	(+)	(+) (+)	(+) (+)	7 5	100	100
5 <	(+)	(+)	(+)	(+)	2	100	100

としてisoからlowを示し、T<sub>2</sub>強調画像では軽度から中等度のhigh intensityを基本的に示した。また3例にてT<sub>1</sub>強調画像はhigh intensityを呈した（Table 3）。

肝血管腫36例37病変の検討結果をTable 2に示す。造影CTでは全例腫瘍は描出され、2cm以下の病変にてMRIは23例中21例91%描出した。描出されなかつた2例は1cmの肝ドーム下病変であった。T<sub>1</sub>強調画像にて描出されなかつた病変は肝左葉に存在し呼吸によるアーチファクトや消化管とのpartial volume effectにより描出されなかつたと考えられた。2cm以上の病変はCT、MRIともに全例描出された。

肝血管腫はT<sub>1</sub>強調画像で7例描出されなかつ

たが、描出された症例は全例low intensityを示し被膜を認めず、T<sub>2</sub>強調画像にて中等度から高度のhigh intensityを示した（Table 4）。

## 症例提示

### 症例1：（典型的な肝細胞癌）

53歳、女性。肝硬変で当院内科外来受診中、腹部超音波検査で肝S5に30mm大の腫瘍を指摘され肝細胞癌を疑い、MRI施行。T<sub>1</sub>強調画像（Fig. 1a）で被膜を伴つた30mm大の腫瘍を認め、T<sub>2</sub>強調画像（Fig. 1b）で腫瘍は軽度high intensityを示した。

### 症例2：（治療後の肝細胞癌）

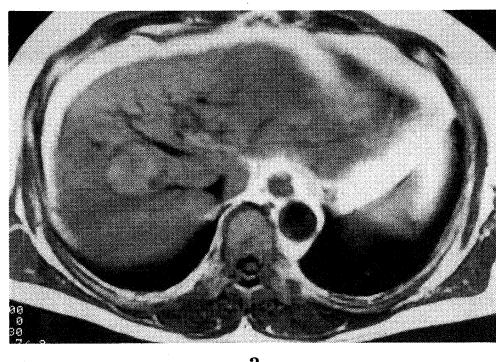
60歳、男性。肝細胞癌に対し、TAE、PEIT治療を行いPEIT4日後のMRI（Fig. 2）。T<sub>1</sub>、

Table 3. Change in intensity (hepatoma)

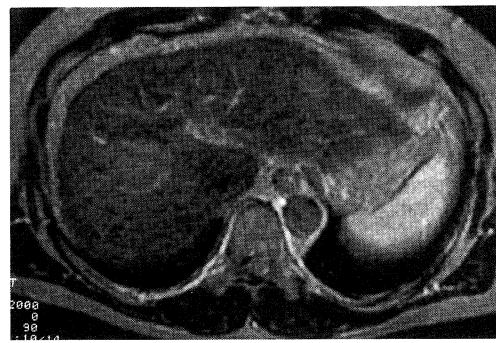
diameter(cm)	MRI T <sub>1</sub>	MRI T <sub>2</sub>	No.
2 >	low (++)	high(+) (++)	2 1
	high (+)	high(+) (++)	1
	?	high(+) (++)	3
		high(+) (++)	
2 ~ 5	low (++)	high(+) (++)	8 3
	iso	high(+) (++)	2 1
	high(++)	high(+) (++)	1 1
	?	high(+) (++)	1
		high(+) (++)	
		high(+) (++)	
5 <	low(++)	high(+) (++)	3 3
	?	high(++)	1

Table 4. Change in intensity (hepatichemangioma)

diameter(cm)	MRI T <sub>1</sub>	MRI T <sub>2</sub>	No.
2 >	low (+)	high(++)	1
	low (++)	high(++) (++)	3
	?	(+++)	10
		high(+) (++)	2
2 ~ 5	low (+)	high(++)	4
	low (++)	high(++)	8
5 <	low (+)	high(++)	1
	low (++)	high(++)	1



a



b

Fig. 1. Typical case of hepatoma a) an MRI T<sub>1</sub> weighted image shows iso-intensity mass with a low intensity rim b) A T<sub>2</sub> weighted image shows slightly high intensity mass.

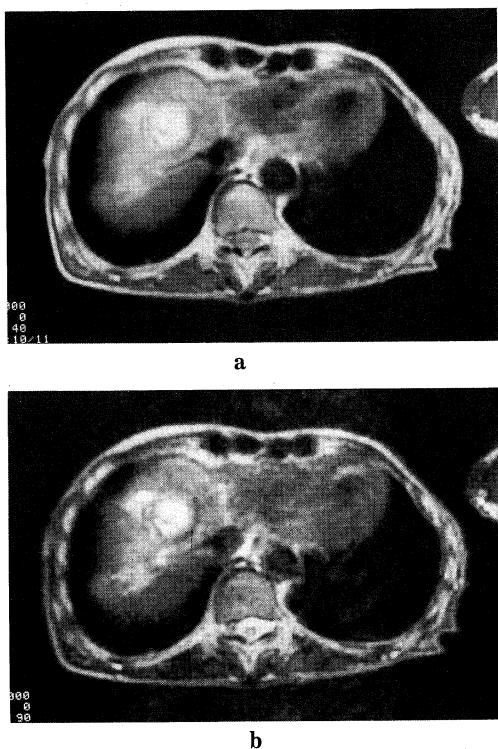


Fig. 2. Hepatoma post TAE a), b) T<sub>1</sub> and T<sub>2</sub> weighted images show high intensity mass due to hemorrhage.

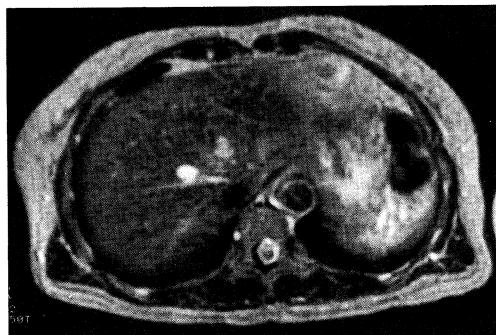


Fig. 3. The high intensity mass, which apparently was different from the vein found near the middle hepatic vein by the T<sub>2</sub> weighted image, led to the diagnosis of hepatic hemangioma.

T<sub>2</sub>強調両画像共high intensityで、病変部位の出血壊死を表わしているものと推測したが、治療効果は判定出来なかった。治療直後の評価はCT同様に困難と思われた。

**症例3：**(CTでわかりにくかった血管腫)

52歳、女性。人間ドックの腹部超音波検査で肝S8に10mm大の高エコーな腫瘍を指摘される。CTで中肝静脈の近傍に肝静脈と同等に造影される腫瘍がみられたが、腹部超音波で指摘された腫瘍か否か断定しきれず、MRIを追加施行(Fig. 3)。CTと同じ部位にT<sub>2</sub>強調画像で肝静脈とは明らかに異なるhigh intensityな血管腫が確認された。

## 考 察

近年、超音波、CT等の機器の進歩により小さい肝腫瘍も発見されるようになり、また鑑別診断能についてもほぼ確立されてきている。MRIはその高いコントラスト分解能および自由な撮像断面により肝腫瘍性病変においてもその有用性は数多く報告してきた。

2cm以下の小肝癌において平井ら<sup>3)</sup>はMRIで84%のdetectabilityを示し56%だったCTより有用であると述べ、蒲田ら<sup>4)</sup>はMRIで97%、CTは61%と明らかなMRIの検出能の高さを報告している。しかしながらその評価は現在も一定していない<sup>5),6)</sup>。今回検討した当院MRI装置における小肝癌のdetectabilityは54%でCTは77%であった。MRIのdetectabilityが低値であった原因としてMRI装置が平井らの1.5テスラと異なり0.5テスラと静磁場強度が低く画像がやや不鮮明であることや、呼吸同期や呼吸停止による撮像を行わず呼吸によるアーチファクトが強かったこと、GRASS法等を用いたdynamic MRIを行っていないことが考えられた。

小肝癌における今回の我々の検討結果は必ずしも満足いくものでない。現状の装置の能力を考えればdynamic MRIが追加可能であるが、一スライスの撮影に二十数秒かかり目的とする腫瘍がはっきりしない細小肝癌においては実施困難と思われる。また、呼吸運動、腸管蠕動、血管の拍動などによるアーチファクトに対して過去にさまざまな方法<sup>7)~9)</sup>が試みられているが必ずしも満足できる結果を得ておらず、アーチファクトの軽減は現状では困難と思われる。

当院MRIで小肝癌の描出能においてはCTを上回る結果がでなかった。しかしながら一方、その高いコントラスト分解能により肝血管腫の診断においては極めて有用と考えられた。

現在肝血管腫はMRIの良い適応疾患といわれ、その検出能はエコー、CTより優れている<sup>3),10)</sup>といわれている。またT<sub>2</sub>強調画像における均一な高信号は特徴的<sup>10),11)</sup>であり、今回の検討において血管腫はすべて均一に描出されたがT<sub>2</sub>強調画像でのhigh intensityの程度は軽度から高度まで様々であった。軽度high intensityの症例は病変が小さいためと思われsignal intensityがあまり高くなかったが他の画像とあわせ、肝血管腫と診断された。また、他の画像診断にて血管腫が疑われMRIでも血管腫が考えられたため、生検や血管造影を行わず経過観察された症例はその後腫瘍影の増大を認めず血管腫と考えられ、不要な侵襲的検査を施行せずに確定診断され、MRIが極めて診断に有用であった。

3月までに検査が施行され診断が確定的な症例を対象とし、極端な巨大病変や多発病変を除いた68症例74病変のdetectabilityおよびsignal intensityの変化について検討した。

- 2：検討症例の内訳は原発性肝癌32例37病変、肝血管腫36例37病変であった。
- 3：原発性肝癌においてMRIはCTに比して2cm以下の小腫瘍性病変のdetectabilityが劣っていた。
- 4：原因としてMRIは呼吸停止下の撮像を行わないため呼吸によるアーチファクトが強く、また撮像時間が長いためCTのように予想病変部位を狙った検査が困難なためと考察される。
- 5：MRIは肝血管腫が疑われた症例にて侵襲的な生検や血管造影を施行せずにはほぼ確認診断が行われ有用であった。
- 6：現在のところ肝腫瘍性病変における当院MRI装置の意義は、時に診断に苦慮する肝血管腫の確認診断が主と考えられる。

## 結 語

1：当院MRI装置にて1990年4月から1993年

## 文 献

- 1) 吉川宏起：肝癌、胆囊癌のMRI. 日本臨床 45:145-152, 1987
- 2) 山本晋一郎、大元謙治、高取敬子、山本亮輔、井手口清治、大海庸世、日野一成、平野 寛：肝疾患におけるMRI診断—CTからMRIへ. 川崎医会誌 15:623-629, 1989
- 3) 平井賢治、小野尚文、谷川久一：原発性肝癌のMRI—超音波、CT、血管造影との比較を中心に. 画像診断 10:1299-1304, 1990
- 4) 蒲田敏文、松井 修、角谷真澄、吉川 淳、荒川和徳、高島 力、亀山富明：肝細胞癌のMRI. 臨床画像 6:58-67, 1990
- 5) Moss AA, Goldberg HI, Stark DB, Davis PL, Margulis AR, Kaufman L, Crooks LE: Hepatic tumors: Magnetic resonance and CT appearance. Radiology 150:141-147, 1984
- 6) Glazer GM, Aisen AM, Francis IR, Gross BH, Gyves JW, Ensminger WD: Evaluation of focal hepatic masses: A comparative study of MRI and CT. Gastrointest Radiol 11:263-268, 1986
- 7) Edelman RR, Hahn PF, Buxton R, Wittenberg J, Ferrucci JT, Saini S, Brady T: Rapid MR Imaging with Suspended Respiration: Clinical Application in the Liver. Radiology 161:125-131, 1986
- 8) Wood ML, Runge VM, Henkelman RM: Overcoming motion in abdominal MR imaging. AJR 150:513-522, 1988

- 9) 湯浅祐二：検査法のポイント、「最新MRI診断」(竹中榮一, 平松慶博編). 東京, メジカルビュー社. 1990, pp 162-171
- 10) Itai Y, Ohtomo K, Furui S, Yamauchi T, Minami M, Yashiro N : Non-invasive diagnosis of small cavernous hemangioma of the liver ; Advantage of MRI. AJR 145 : 1195-1199, 1985
- 11) Stark DD, Felder RC, Wittenberg J, Saini S, Butch RJ, White ME, Edelman PR, Mueller PR, Simeone JF, Cohen AM, Brady TJ, Ferrucci JT Jr. : Magnetic resonance imaging of cavernous hemangioma of the liver ; tissue-specific characterization. AJR 145 : 213-222, 1985